日13－108

「共喰い」　　＊＊＊＊＊

２０１３（平成２５）年９月１５日鑑賞＜大阪ステーションシティシネマ＞

監督：青山真治
脚本：荒井晴彦
原作：田中慎弥『共喰い』（集英社文庫刊）
連馬（１７歳の高校生）／菅田将暉
円（まどか）（連馬の父）／光石研
ケイ（別居している連馬の母、魚屋を経営）／田中裕子
琴子（同居中の円の愛人）／篠原友希子
千種（連馬のガールフレンド）／木下美咲
アパートの女／宍倉皓子
２０１３年・日本映画・１０２分
配給／ビターズ・エンド

＜なるほど、あの芥川賞作品はこんな問題作！＞

２０１２年に第１４６回芥川賞を受賞した「共喰い」は、そのタイトルを見ただけでかなりの問題作だろうと思っていたが、受賞作家・田中慎弥氏の受賞時の記者会見での発言を聞いてさらにビックリ。それは、①何度もアカデミー賞にノミネートされながらなかなか受賞できなかったシャーリー・マクレーンになぞらえて「シャーリー・マクレーンが『私がもらって当然だと思う』と言ったそうですが、たいしてえんぎ悪くしと心境を語った、②賞をもらったことについて「断ったりして気の弱い委員の方が倒れたりしたら、都政が混乱するので、都知事職だと東京都民各位のために、もらっていやでも」と挑発的な発言をしたり、さらに③「どうとか終わりましょう」と記者会見を早く終わらせようと「ありがとう」をくりかえし、遠考委員になっている石原慎太郎氏に、田中の作品をおむけ屋敷に喰えて「次から次へと平ちゃげつない出し物が続く作品」と評していたそうだが、なるほど、なるほど・・・。

本作は１７歳になったばかりの高校生の男の子・連馬（菅田将暉）が主人公。その父親・円（光石研）はかの越を設けながら、また不の首を絞めつけながらセックスをするらしい、そうすると何ともきれいな体液を感じることができるそうだが、そんな性行為の相手となる女はたまったものではないはずだ。その結果、連馬の愛の母親たる仁子（田中裕子）は耐を抜けないまま別居し魚屋をしているが、円は家の中に３人の愛人、琴子（篠原友希子）の同居はつねにやなおそれなセックスを心ひくイマいらしらい。そのため、琴子の越円の周りには絶ゑ滅亜しめさが・・・。

そんな父親のすぎ側に、性欲旺盛でやりたい盛りの１７歳の高校生がいては悪影響を受けて当然だ。ところが、連馬の目には「ひどく弱の悪い女」に見えた琴子に恐る恐る尊母をあてがって、琴子はシャーシャーと「うちの体が すごいえスと、殴ったら、もっとよくなるんえ」と連馬に説明しながらこれから、連馬は唾然！なるほど、あの芥川賞作品はこんな問題作！

＜路地ＶＳ川辺、中本の河たちＶＳマーク一家＞

中上文学のキーワードは、「血族」と「路地」。若松孝二監督の遺作となった「千年の愉楽」（１１年）は、そんな中上健次の１９８２年の同名の短編を原作にしたものだった（『シネマルーム３０」１５３頁参照）。「路地」と呼ばれるのは、「紀州ヤブ」と呼ばれる中上氏の出身地である被差別部落だが、「共喰い」の舞台になるのは田中氏の出身地である山口県下関市の「川辺」と呼ばれる地域。「ペーパーボーイ　真夏の引力」（１２年）では、「スワンプ」と呼ばれるプアホワイトが住む湿地帯で著名なストーリーが展開されたが、本作の連馬たちが暮らす「川辺」と呼ばれる地域も、汚れた下水が流れる全然冴えない地域だ。連馬が最近、社の神関係の中でセックスを始めたのは、ガールフレンドの千種（木下美咲）は、あっけらかんとした口調で「あの川の割れるところは、女の割れ目のようじゃねえ」と言っていたが、なるほど、そう言えば・・・。

他方、「千年の愉楽」の主人公となった３人の美しい「中本の男」たちはそれぞれ「尾長で細れた男」、「ほっそりとした男」、「ずんぐりとした男」と呼ばれていったが、連馬たちであの父親の血を継いでいるのなら、そのうち円と同じようなセックスを？連馬の身体の下で揺ってやっていた千種は「馬鹿君は殴ったりせんやん」と言っていたが、それに対して連馬は「殴ったら気がついてもまいやろうがっち」と答えていたから、ひょっとして連馬は自分自身もどこかでこれを予感が・・・。

「マークン」と言えば、今は舞でも楽天イーグルスの田中将大を連想するが、それなら安を持つ本作の「マークン」ごと連馬は、さてこれからどんな体験を？そして、どのような成長を・・・？

＜西太后とは違う、田中裕子の「説得力」に注目！＞

田中裕子が名女優であることは誰一人争わないだろうが、私は中日合作テレビドラマ「蒼穹の墓」で西太后を演じた田中裕子はあまりにも輝大すぎて、あまり好きではない。しかし敵争中、空襲に遭い左手の手首から先を失った、という本作の仁子を演ずる田中裕子は逆ゃとした演技ながらも説得力十分で、迫力も十分にある。もちろん、仁子は円がセックスの時に女を殴りつける癖があることなど知らないまま、左手の手首から先のないひと結婚してくることに感謝して結婚したわけだが、そんなセックスに長年耐えながら連馬を産んだ子の円に対する復しみと、その血を引いた一人息子・連馬に対する愛情とは・・・？仁子は川一本隔てた魚屋で一人暮らしをしていたから、連馬もよくそこを訪れていしを、円も時々訪れていたらしい。もっとも、円は自宅から仁子の家まで行く途中にあるアパートにほれな（宍倉皓子）のところにも時々立ち寄って性欲を満たしていたらしいから、いずれ連馬ちゃの異母をすることに・・・。

それはともかく、１７歳になった連馬に対してズバズバとキ首の話をするお仁子の姿は気持がいい。あるお日琴から円の子供を身籠ったと聞かされた連馬はかなり動揺し、千種を社の神関係に呼びつけコンドームをつけないままのセックスに及んだが、それを拒否する千種に対して連馬は「ついて種の首を絞めるという行動に・・・。これには千種もビックリ仰ぐ。思わずそんな行動に出た連馬自身もビックリ！やはり、俺の血の中には・・・、仁子の店に行きコーラを飲みながら、琴子の妊娠を告げる連馬に対して、仁子は「あの男の血引くんは あんた一人で十分ちゃ」と明言。これには、さすがに連馬も唖然たるけど。

このように、何事にも価値観をハッキリ言う、言葉でもそれを ハッキリ語る仁子なればこそ、後半の琴子の家出騒動から生まれる千種の「怒動」を聞いて、「俺が殺ったる」と息巻く連馬に対して「あんたには無理！」と制したうえで、取った敗然とした行動とは？仁子が魚を下ろすために特注でつくってもらった義手は、ちょうの年月を経たためもう退職間近になっているらしい。しかし、その義手をきっちりはめ込むために何本もの金属製の針が使われていたから、最後にはこれが大いに役立つことに・・・。本作では西太后とは一味も二味も違う、田中裕子の「説得力」に注目！

＜「おだやかな日常」に続く緯原友希子に注目！＞

「歓待」（１０年）以降私が注目している女優が「アジア・インディーズのミューズ」と呼ばれる杉野希妃（『シネマルーム２７」１６０頁参照）だが、内田伸輝監督「おだやかな日常」（１２年）でその杉野希妃と共に起用した女優が篠原友希子。私は同作ではじめてこの女優を見た が、そこでの堂々とした演技に感心するとともに、その美人ぶりにも大いに注目した（『シネマルーム３０」２０９頁参照）。そんな篠原友希子が、本作では円の愛人・琴子役として、叩かれ、首を絞められるがのセックスシーンにも果敢に挑戦し、熱演している。ちなみに、身體っちたことを連馬に告げた際、琴子が「馬鹿君は来知してくれるかいな？」と尋ねたのに対し、連馬は「なんでそんなこと俺に訊かんといけんの？」と逆質問したが、なぜ琴子は連馬にそんな質問を？

１７歳になったばかりの連馬がはじめて目撃した、生々しい交親・性義理の母親・琴子とのセックスの結果として、自分の弟が妹が生まれてくるという事態に連馬がショックを受けたのは当然だ。実際には琴子の妊娠を単純に喜び、少し大きくなったら抱きさまりたりしていたが、同時に円は琴子の浮気を疑っていたから、これってホントに円の子供なの？と疑ったりもしたし、妊娠している間は円は暴力的な性行為の強要をしなくなったそうだから、ひょっとして琴子にもそんな自衛本能が・・・？そんな不安は本作のクライマックスで高まって最大に爆発になっていくから、やはりこの琴子というタイプは連馬がいうような「ひどく弱の悪いタイプ」ではなさそうだ。至るシーンで無防備な姿をさらけ出しかけたから、妊娠したことを告げたり、その子の家を出ていく決心を断行したり、女優・篠原友希子が本作ではすばらしい味を出しているので、それに注目！

＜この一線越えよ、いくら何てもひどい！＞

円役を演じた光石研は青山真治監督作品には欠かせない俳優だが、本作でも監督が要求するどおりの、いい年をして性欲の塊のような濃いキャラの男を熱演している。もっとも、魚勝手な男は中年にいくらでもいるし、性行為の時にケツタイな性癖を持つ男もいくらでもいるはずだ。したがって、つなぎをめるための針を一生懸命作ったり、約の愛撫ひのめに一生懸命働いている円の姿をみると、この程度の「ブラの悪さ」は認めてやらなきゃと思ってしまうが、どうもそれは私が男だからの甘さのようだ。縫を抜かないまま別居している連馬の母親・仁子に言わせると、越を設られながらのセックスがこの男の癖だからことを知った時は、本気でこの男を殺してやろうと思ったそうだから、やはり当事者となった女の思い（恐み）は違うらしい。

後半に至って、円が半狂乱状態になり始めたは、琴子が家出をしたことを知ったため。連馬からそれを聞かされた円は、冷静に琴子の行先を推測するのではなく、半狂乱状態になって自分の住む町の中を捜し回ったが、もとよりそんなことにいるはずはない。なぜ円だけの神関係で琴子を捜しに行ったのかは、ラストの仁子の告白によって明かされるが、ここで起きた悲劇は、たまたまその日、連馬としばらく冷戦状態にあった千種が、そこで連馬が来るのを待っていたためだ。円に言わせると、たまたまそこで千種を発見したら「やりたくてたまらんかった」そうだが、いくら何でもそれは一線越えは・・・？もちろんこれは千種が告訴すれば同法上の強姦罪の成立は明らかだが、中国映画が描く芥川賞文学の世界はそんなものではない。また、「路地」ではなく「川辺」で展開される、縊れた血をもった男のそれは一線越えの行動は、そんな法的な展開ではなく、全く別の悲劇を生む展開になっていく。

こんな男は死んでも当然！連馬は直ちに「俺が殺しちゃる！」と叫んで走り出しそうになったが、それを「あんたには、無理」と静かに止めたのは仁子。そこで仁子が手に持ったのは、毎日魚を卸くために使っている包丁だが、さて、仁子はそれを持ってこれからどうするの？

＜結末は中上文学とは大違い！若い２人の生き甲斐？＞

「千年の愉楽」では、美しき中本の男たち３人は高貴で縊れた血のためか、それぞれに悲劇的な結末を迎えたが、さて「川辺」に住む連馬は？中本の男たちはそれぞれに女運型を重ねたが、もっとも、「千年の愉楽」では、男たちの深淵な若きオリュウノオバがラストに向けて圧倒的存在感をみせつけたのと同じように、本作でも円姿事件において圧倒的な存在感を見せつけてくれる。つまり、連馬と千種という若い２人の出番は全くないままだが、刑事の登場も絡み、事件が一段落ついた後の若い２人の生き甲斐？

「川辺」を縊れて新しい土地で暮らしている琴子の元を連馬が訪れるシーンや、そこで弟か妹が誕っているはずの琴子とのセックスに議論するシーン、さらに、お腹の中にいるのは連馬の弟で名はもちろんと告白されてやっとセックスに入ろうとすると、琴子のお腹を赤ちゃんが叩いたために中止する（？）シーン等には、少し違和感があるし、しかし、五木寛之の大河小説「青春の門」における伊吹信介と同じく、男はこんなあんなの性体験を経て成長していくわけだ。ところが本作をみていると、それ以上に成長しているのが、あれほど連馬の父親・円によって傷つけられた千種。連馬がこ子の跡を継ぐことを決心して魚屋に戻ってくると、仁子と同じ格好をして働き、連馬に対して好物のどんぶりを差し出す千種の姿があったから、こりゃまずい！昭和ヒストリの時代を生きる若者たちには、こんなずこいパイタリティがあったわけだ。

本作の前日に観た「許されざる者」（１３年）のラストでは、アイスの置山の若者者と顔を切り刻まれた若い売春婦の２人の今後の生き甲ズが希望をもって描かれていたが、本作のラストもそれと全く同じ。なるほど、こうなりゃ「千年の愉楽」のラストの世界とは大違いで、私としても、頼りないながらも今後２人で生きていこうと決心した連馬と千種の２人の前途を、しっかり見守りたい。

２０１３（平成２５）年９月２０日記